

平成22年度 和歌山県文化功労賞

くり はら しょう
栗 原 省 (本名 栗原昭三)

住 所：和歌山県有田郡有田川町

出 身 地：群馬県邑楽郡邑楽町

生 年：昭和3年

氏の旺盛な演劇活動は更に続き、現在、県内で演劇に取り組んでいる人々の中にはその指導を受けた人が数多く、地域演劇文化の向上と振興に果たした功績は計り知れない。

◎業績及び経歴

昭和3年群馬県に生まれる。昭和27年東京高等師範学校(現筑波大学)文科一部を卒業後、和歌山県立高等学校で教職に就き、社会科を担当、初めて赴任した高校で演劇部顧問となったのが、今日に至る演劇活動の原点となる。

教職のかたわら、昭和39年には自らが主宰する「劇団いこら」を設立し、以来40年間、有田地方を拠点に、人権問題や県内の民話を題材にした作品を創作・演出した。特に、部落差別問題をテーマに描いた「茨とラッパ」、「吞んだくれ」や、龍神の民話を劇化した「河童詫証文」などは反響が大きく、「劇団いこら」の名は全国的に知られるようになった。

平成2年には和歌山県民文化会館創立20周年記念事業として、氏が脚本・演出した県民参加型公演「真夏の夜の夢」、それに続くけんぶんプロデュース公演「モモ」(平成3年)、「星の王子さま」(平成7年)は大きな反響を呼び、県内の演劇文化の向上に大きく貢献した。

氏はその他、県内各地の歴史・伝説を劇化・演出し、御坊市の劇団RAKUYUのための「道成寺」、有田市のリゾート博参加作品「中将姫まんだら」、有田川町の宗祇法師500年記念「KATSU」など、地域の文化資源の掘り起こしにも貢献した。

劇団いこら解散以降は、特に朗読の指導に力を注ぎ、平成16年に創作・演出した『証言による朗読劇「ハテルマ・ハテルマ」』は初演以来足かけ8年に及び、県内各地や大阪、名古屋、沖縄でも上演され、高い評価を受けている。

■現在

劇作家・演出家

西日本劇作の会会長

財団法人和歌山県文化振興財団文化事業アドバイザー

日本劇作家協会会員

関西演出者協会会員